

少字数作品の制作

藤 森 大 雅 (大 節)

Hironasa (Daisetsu) Fujimori

書を志して間もない頃から少字数の大字作品に対する強い憧れがあった。これまで何度か少字数作品に挑戦したものの、力不足を痛感し、次第に制作の機会は減っていった。

ある時、思いがけないタイミングで大字作品を制作する機会を得た。割り当てられた広い壁面を埋めるために、何種類もの草稿を作成し、無我夢中で制作にあたった。一年前から制作を開始し、ようやく形に仕上げる事ができた。背中を押された形ではあるが、新たな課題へ挑戦する機会を与えていただいたことに感謝している。これを機に、自らの力不足には目をつぶり、少字数作品や大字作品の発表を続けている。本作もその流れに位置づけられる。

大字作品の制作において、選文はその成否を大きく左右する。言葉の内容と文字の造形がともに良いのが理想であるが、なかなかそうはいかない。本作の題材には『老子』第三十章の「物壮なれば則ち老ゆ」（強壯であるとすぐに老衰してしまう）の四字を選んだ。

決して書き易い字句ではないが、以前から書きたいと心に残っていたため、この機会に作品化することにした。当初は方形の紙面に孫過庭の「書譜」にみるようなオーソドックスな草書体で、妍媚さよりも質朴さをイメージして制作にあたった。自分なりに言葉の意味を汲み取りながら、表現的な要素はできるだけ排除し、普遍的な表現を目指したものの、いざ筆を執ってみると曲線を主体とした字形が紙の方形と調和せず、思い描いたイメージに近づかない。字句を変えるか悩んだものの、書体や表現様式、紙の形式などを工夫することに心を決め、試行錯誤を続けた。様々なパターンで制作したものの、結局は普段の表現方法によったものに落ち着いた。勁い筆力、静と動を意識した文字構造、そしてそれらを引き立たせる空間処理に配慮したつもりであるが、作品化に意を払うあまり、最終的には字句の意味と矛盾した表現になったと感じている。



物壯則老

79.7×79cm